

ルネ研資料や新聞さん・原均さんの文章を読んで

2017年7月30日大谷美芳

関西のルネ研の議論や新聞さん・原均さんの主張、「機動戦と陣地戦」「過渡的綱領と革命的民主主義・人民民主主義」「政治運動・政治革命と社会運動・社会革命」などの論点に接してとても「感激」しています。これらは、70年闘争の敗北と新左翼と挫折・破綻の後にも当然にも継続している日本の人民闘争の現状から出てきた論点でしょうが、それが、中国の文革敗北と変質を中心にロシア革命・中国革命、ひいては国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の総括をずっと考えていた現在の結論と、ぴったりと出会っていると感じます。

その総括の現在の結論。ソ連でも中国でも、プロレタリア階級=共産党が国家権力を握りそれを使って、社会主義の基礎となる工業化・国有化と農業集団化を実行したが、この機械制大工業そのものが、それを経済的基礎とする社会と国家そのものが、その管理と運営に必要で官僚と官僚主義を生み出し成長させた。そして、この官僚と官僚主義が国家と社会の全体を支配し変質させ、ブルジョア階級独裁と官僚制国家資本主義に転化させた。

そうすると、真のプロレタリア階級独裁、真の社会主義は、官僚主義に反対し、プロレタリア階級がコンミュン・ソヴィエト型の国家で機械制大工業という経済的基礎から社会を自主的大衆的に管理・運営する、ということになる。しかし、プロレタリア階級はそれをどのように準備し、その能力をどのように養成し訓練するのか、という問題になる。

それに対する回答が、現在の人民闘争の中から出てきている「機動戦と陣地戦」や「過渡的綱領と革命的民主主義・人民民主主義」や「政治運動・政治革命と社会運動・社会革命」などである、と感じています。

(1)「機動戦と陣地戦」について

・いわゆる政治闘争は「機動戦」ではなく「陣地戦」

貴君の文章。「実際上の戦争法、共謀罪、改憲、・・・さらには沖縄、反原発等の『政治的大衆運動』をどう位置づけ、考えるかにあります。」「歴史的な「機動戦」の顛末を持って、模索を放棄する事はおかしいと思います。」

いわゆる全人民的な政治課題をめぐる政治闘争、例えば15年の反安保法闘争や将来想定される改憲阻止闘争などを「機動戦」と考えていますか？確かに第2次ブンドはそれを「機動戦」と考え、赤軍派はその戦術的エスカレートとして「中央権力闘争」→「武装蜂起」「革命戦争」を考えました。それは小ブルジョア急進主義と清算的に総括していますが。

しかし、このような政治闘争は、「陣地戦と機動戦」という概念で言えば、「機動戦」ではなく「陣地戦」だと考えます。中核派関西派の大伴一人『グラムシ論』を読み直して考えてみましたが、グラムシの理論からしてもそうだと考えます。

・「陣地戦」は資本主義に対する人民民主主義的統制

「陣地戦」とは、ブルジョア国家と資本に対する、行政と企業に対する、ブルジョア階級独裁と資本主義に対する、人民(圧倒的多数はプロレタリア階級)の下からの民主主義的統制だと、私は考えます。それが、例えば、安保法や改憲に反対する政治課題でも、時給最低1500円や非正規の正規化を要求する経済的課題でも、保育所増設や産休育休の拡大を要求する社会的課題でも、全て「陣地戦」だと考えます。

資本主義を批判し、社会主義革命(資本を収奪し生産手段をプロレタリア階級の共同所有とする)の要求を組織し、ブルジョア階級独裁国家の打倒とプロレタリア階級独裁国家の樹立を目標とするが、しかし、それに至る前の当面の人民の必要として、また、人民がそれに至る有利な条件として、ブルジョア階級独裁と資本主義に対して徹底した民主主義的統制を下から加える。こう規定される。

「陣地戦」は、資本主義の矛盾と危機が進み深まれば、拡大し深化する。ブルジョア階級と資本主義の社会的国家的支配力・統合力を空洞化し弱体化させ、その対極に、人民(プロレタリア階級)の大衆的で自主的な、「共同的」「共生的」な(最近よく使われる言葉)政治的、

あるいは社会的、さらには経済的な組織が形成され発展する。最高の形態は歴史的経験的にはコンミュン、ソヴィエト、レーテ(ドイツ)、工場評議会運動(イタリア)、など。それはプロレタリア階級独裁国家の基盤、社会主義でプロレタリア階級が生産手段を共同所有し(国家所有や集団所有)、生産と労働を大衆的自主的に管理・運営する基盤になる。

しかし、ブルジョア階級独裁の国家権力が存在する限り、「陣地戦」はブルジョア階級独裁国家と資本主義社会に対する人民(プロレタリア階級)の下からの民主主義的統制に止まる。まだ決してプロレタリア階級独裁国家、社会主義社会ではない。「陣地戦」の発展で社会主義社会を展望したのがトリアッティーの「構造改革」。

反原発闘争の一環で、人民が電力会社に対する闘争と並行して、協同組合経営の太陽光発電企業を起ち上げると、それは「陣地戦」、資本主義に対する人民民主主義的統制です。しかし、民主的資本、資本主義の民主化であって、まだ社会主義ではない。

・「機動戦」の勝利で「陣地戦」は社会主義に転化

社会主義、資本を収奪し、生産手段をプロレタリア階級の共同所有とするためには、ブルジョア階級独裁の国家権力を除去しなくてはならない。それが「機動戦」である。「機動戦」とは、ブルジョア階級独裁の国家権力を打倒しプロレタリア階級独裁の国家権力を樹立する、この政治革命を達成するための暴力革命、武装蜂起や革命戦争である。「陣地戦」は「機動戦」にとって「解放区」の役割を果たす。「機動戦」の勝利によって、コンミュン・ソヴィエトは「全権力の掌握」、国家となる。そこで「陣地戦」は革命的民主主義・人民民主主義→社会主義に転化する(量的変化が質的転化になる)。

こういうことがグラムシの「ヘゲモニー論」だと、私は考えます。そして、「陣地戦」は長期間、広く深く闘われれば、その方がいい。プロレタリア階級独裁と社会主義の国家と社会を運営し管理するプロレタリア階級とその革命党の準備がよりなされ、能力がより養成・訓練される。ここで、ソ連や中国やベトナムの変質・転化の総括とぴったり出会う。

・「党の軍隊」と「国家の軍隊」および「党の指導性」という憲法規定

ここからは現在はまだあまりにも非現実的ですが、この「機動戦」=武装蜂起・革命戦争を実行するのは、統一戦線の最高形態であるコンミュン・ソヴィエトではなく、プロレタリア階級の革命党でしょう。革命の軍隊はコンミュン・ソヴィエトの軍隊ではなく、党の軍隊でしょう。しかも実際は、その唯一の革命党を目指す複数の党派の軍隊でしょう。ロシアではツァーの国家権力は相当崩壊していたし、ボルシェヴィキ党の組織力が強かったので勝利した。しかし、ドイツやイタリアでは両方の条件ともなく敗北した。中国革命やベトナム革命の総括からして、共産党の軍隊であるから革命戦争に勝利した。

きっと、プロレタリア階級独裁の全国的な樹立と勝利の後に、党の軍隊を国家の軍隊に再編することになるでしょう。プロレタリア階級の単一の革命党が実現できていない場合、複数の党派の軍隊を国家の軍隊に統一することになるでしょう。もともと国家は統一戦線。官僚制国家資本主義の現象論的批判で言われること、つまり「党の指導性」を憲法で法制化すべきでないことも含めて、これも中国・ベトナムの総括で中心論点。

・70年闘争と新左翼の「機動戦と陣地戦」の経験

また、赤軍派のわずかな体験や中核派・解放派の「対革マル戦争」を見ても、70年闘争の全共闘と新左翼の党派部隊の関係からも、党の軍隊と言える。70年闘争においては、学生という人民のほんの一部(学生はブルジョア階級の代理人=国家官僚・会社官僚の予備軍からプロレタリア階級の予備軍にその社会的地位が変化しつつあった)に依拠しただけ、全共闘運動という資本主義社会のほんの一部である大学における「陣地戦」に依拠しただけ、軍隊とはとても言えない学生の党派部隊による「機動戦」ではあった。しかし、そこには「機動戦と陣地戦」の関係が存在した。

(2) 新開さんの「過渡的綱領」あるいは「革命的民主主義」「人民民主主義」

・新開さんの文章

・この“革命的民主主義派”なる用語はこの時期に突如登場したものではなく、いわゆる

帝国主義的経済主義批判として登場する。これは毛の“新民主主義”とも通じるものだが、社会主義ないしプロレタリア独裁といわずにこの用語を使用する意味は重要である。つまり、それへの移行過程、あるいはその当面の内容を具体的に指し示すこと、統一戦線（他階級との関係＝「配慮」）を重視。

・毛の「持久戦論」→「新民主主義論」が相対的には最も正しい。抗日統一戦線でヘゲモニーを譲り渡していないだけでなく、“左翼主義”ではなくプロレタリア独裁一般を主張することなく「新民主主義」を主張したこと。抗日とその後の建設時の階級関係（農民や民族ブルジョアとの関係）を見ていること。おかしくなるのは、この新民主主義を捨てて“大躍進”により社会主義段階へと“飛躍”すること。

・革命的民主主義・人民民主主義 それが社会主義を準備する

レーニンの「革命的民主主義」は『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』で「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」が出発点。毛沢東の「人民民主主義」は『新民主主義論』で「人民民主主義独裁」として提起。いずれもブルジョア民主主義革命で、プロレタリア階級が革命の主導権を握り国家権力を握ること、革命を徹底して人民が資本主義を最大限に統制し、プロレタリア階級独裁と社会主義革命へ前進する有利な条件を築くこと。国家権力を握って上から統制するか、国家権力は握ってなくて下から統制するか、この差異はある。しかし、資本主義に対する人民の民主主義的統制の点で、プロレタリア階級独裁・社会主義革命の有利な条件を築く点で、本質的には、直接的な社会主義革命に直面したブルジョア階級独裁の下での「陣地戦」も同一・同質。

つまり、新開さんの「過渡的綱領」とは「陣地戦」の綱領。それは国家と社会の全分野の全ての問題を網羅し、ブルジョア階級独裁と資本主義に対する人民の統制を最大限に広め深め、ブルジョア階級の力を最大限に空洞化するものでなくてはならない。そうであればあるほど、将来、プロレタリア階級独裁と社会主義で国家と社会を管理し運営するプロレタリア階級の能力が養成され訓練される。

・中国における人民民主主義→社会主義の失敗

中国革命では、人民民主主義独裁の下での工業化・国有化と農業集団化、これは「社会主義的改造」と言われるが、実際は国家資本主義（ただし「官僚制」ではない）、つまりは国家権力を握った人民の上からの資本主義に対する統制。ここまではいい。50年代前半まで。

ところが、50年代後半からの「大躍進」が大きな誤り。国有化と集団化の後には、これはゆっくりと時間をかけざるをえないが、その経済に対する人民の自主的大衆的な管理・運営を進め、それを基礎に国家のコンミュン・ソヴィエト化を進め、こうして人民民主主義独裁をプロレタリア階級独裁へ転化して社会主義革命に進むべきだった（農業集団化も小規模な高級合作社の方が自主的大衆的管理をやりやすい）。

ところが、国有化・集団化=社会主義→生産力発展、「資本主義第2位のイギリスに追いつき追い越す」に突き進んだ。あの「持久戦論」の毛沢東がなぜこんな急進主義？ 毛沢東もマルクス・レーニン主義も、官僚と官僚主義こそがブルジョア階級とブルジョア階級独裁・資本主義であるとは思ってもいなかった（せいぜい党の組織問題・規律問題・作風問題）。毛沢東がそれに気づいた時は官僚と官僚主義は巨大化していた（規模の大きい人民公社は官僚主義に陥りやすい）ので、文化大革命で事実上の暴力革命をやらざるをえなかった。

しかし、いずれにしても、20世紀では、プロレタリア階級が機械制大工業を経済的基礎とする国家と社会を自主的大衆的に管理・運営する条件は、主体的にも客観的にも存在しなかった。文化大革命の挫折と破綻。

・余談 ブンド総括と日本共産党批判

「革命的民主主義」より「人民民主主義」の方が受けがいい。それにブンドの清算的総括として「小ブルジョア急進主義」はいいが、「急進民主主義」は「革命的民主主義」「人民民主主義」を言わなくてはならないのでまずいかなと感じています。

日本共産党の綱領は「反米反独占の人民民主主義革命から社会主義革命への二段階革命」ですが、しかし、この「人民民主主義」は、暴力革命によるブルジョア階級独裁の打倒とプ

ロレタリア階級独裁の樹立がないので改良主義。永久に社会主義には転化しない。

(3)原均さんの「新しい社会運動」・原均さんの文章

・信用資本主義の成立は、国家権力の奪取をめざした従来の共産主義運動に代わる、新しい社会運動を台頭させている。

・資本の運動は、資本の直接的生産過程、資本の流通過程、資本制的生産の総過程とから成る。1990年代の運動の諸経験は、それぞれの分野での脱物象化の運動論をつくり出した。資本の直接的生産過程では、資本に雇用されない「もう一つの働き方」をつくり出し、これを拡大していくことで、資本による剰余価値の生産の領域を狭めていくことが可能となった。資本の流通過程では、最終消費市場に購買者として現れる労働者、農民、市民が消費の選択をすることで、資本による剰余価値の実現を無化することが可能となった。資本制的生産の総過程においては、既成の資本の信用制度とは別に、労働者、農民、市民が自らの口座を共同で管理する支払決済システムを新たにつくり出すことで、今日社会全体におよんでいる資本の信用制度の支配力を制限していくことが可能となった。

・信用資本主義の下でのグローバルな資本の支配に対する、ローカルのグローバルな新しい社会運動の台頭は、協同思想にもとづく新たな運動と組織を形成しつつある。政治権力を獲得するはるか以前から、資本と国家に対抗する運動を、脱物象化されたアソシエーションを軸として形成していくことで、社会革命を日々押し進め、同時に、国家の政治的権力を脱力させていくことが課題となっている。

・政治革命なしに社会革命はない

最後の文章は、社会革命が政治革命の前にほとんど達成されるかのような印象である。

日本における奴隷制社会=貴族社会から封建制社会=武家社会への社会革命も、貴族の藤原氏政権から武家の平家政権(保元・平治の乱)→鎌倉・室町政権→織田・豊臣・徳川政権、こういう長期の何回かの政治革命(と内戦)を通じてやっと達成された。封建制から資本主義への社会革命も、明治維新で徳川幕府を打倒して成立した天皇制が絶対主義=封建制国家から(士族の反乱を制圧し西南戦争に勝利して)ブルジョア国家のボナパルティズム=ブルジョア階級と封建地主階級の連合独裁へ転化→第二次大戦敗北後にアメリカ軍占領下で封建的土地所有と地主階級が解体されてブルジョア民主主義のブルジョア階級独裁、こういう長期の何回かの政治革命(と内戦)でやっと達成された。

まして階級社会の資本主義から無階級社会の共産主義への社会革命は政治革命、プロレタリア階級独裁国家(社会主義社会はその土台)の実現なしにはありえない。

生産と消費と信用にわたる協同組合が想定されているが、それは社会主義ではない。「陣地戦」で、人民=プロレタリア階級の自主的な大衆的組織が、ブルジョア階級独裁と資本主義に対抗して、協同組合以上に多種多様に形成されるであろう。最高は歴的経験ではコンミュン・ソヴィエト。それはブルジョア階級独裁を弱体化させるし、資本主義を侵害する。しかし、それは社会主義社会の管理と運営のための重要な「学校」とはなるが、まだ社会主義社会そのものではない。しかも、それをブルジョア国家権力が黙認するはずがない。やはり、「機動戦」、ブルジョア階級独裁を打倒してプロレタリア階級独裁の国家権力の樹立する政治革命が必要。コンミュン・ソヴィエトが全権力を掌握してこの新しい国家になるのだが、その前に古い国家が解体されていなくてはならない。

70年闘争と新左翼の敗北は、学生という人民=プロレタリア階級のほんの一部による、大学という資本主義社会のほんの一部でのコンミュン・ソヴィエトに依拠して、学生の党派部隊に等しい幼稚な軍隊で「機動戦」=革命戦争を試みたこと。小ブルジョア急進主義。広範な人民=プロレタリア階級による、資本主義社会のあらゆる分野でのコンミュン・ソヴィエト、この「陣地戦」を基盤としたプロレタリア階級の革命党の軍隊による革命戦争=

「機動戦」、今は夢想的だが、こうとしか考えられない。(2017.07.30)
政治革命は否定してはいないが、資本主義から共産主義へのそんなことはありえない。